海外の絵巻・奈良絵本（在外資料）について

昭和53年、54年に奈良絵本国際会議が、ダブリンとニューヨーク（53年）、東京と京都（54年）で開かれた。今夏、OAG会館で公開講演会が持たれたりして、その動きに注目された方も多かろう。会議メンバーに当館の市古館長が参加しており、東京の会議会場に当館が使用された関係もあって、当部の村上学・徳田和夫、研究情報部の田嶋一夫の三名が、その設営の下準備や運営に協力したことであった。

会議の開催と相まって、海外所蔵のお伽草子を中心とした絵巻・奈良絵本が、サントリー美術館（東京）、思文閣美術館（京都）で一堂に展観された。その美術的価値が注目されて海外に流出した文献類は、伝本研究にあたる国文学研究者にとって容易に接し得ぬもので、垂涎の的であったことはいうまでもない。このたびの展観で、その全貌がほぼ明らかになり、また会議に参加できなかった研究者や愛好家もどうにか希覯本との出会いがはたされた。昭和50年の絵巻展（東京国立博物館）以来の、中世文学の研究史上、特筆されるべき一大エベントとなった。

出品点数は四一点。うち、孤本の異類物語「猿の草子」（仮題・大英博物館蔵）。珍しい趣向の「義経地獄破」、岩佐又兵衛の絵筆という「村松物語」、処々に散った「三十六番舞」の五巻（以上、チェスター・ビーティ図書館蔵）。日本では伝本の少ない「鴉鼠物語」、極小型の「文正草子」（以上、スペンサー・コレクション蔵）等が目にとまった。他にも興味をひいたものも多かったが、紹介のいとまがない。所蔵者は、右の他に大英図書館、フォッグ美術館、バーク・コレクションである。

出品目録に『おとぎ草子・奈良絵本展』（サントリー美術館）、『海外所蔵奈良絵本』（講談社）がある。書名・体裁・時代の説明が図版入りで記されており、参照されたい。また、近日中に角川書店から資料集の刊行も準備されていると聞く。なお、スペンサー・コレクション、チェスター・ビーティ図書館の各目録『日本絵入本及絵本目録』が弘文荘主人（反町茂雄氏）によって編まれている。

絵巻・奈良絵本の類に限らず、在外の国文学資料について、当館がイニシァティブをとって調査研究し、マイクロフィルム撮影をすすめることが、学界の要望としてあがってきている。今後、在外資料の調査・収集の方法について早急に検討されて然るべきであろう。

（第二室　徳田和夫）